

茨城県建築士会
まちづくり委員会
推奨

ひとたちのくに

常陸国の むかしの家

[体感ルート・ガイドマップ] 水戸街道・筑波編

はじめに

まちづくり委員会では、平成19年度から、茨城県に残る“むかしの家”を再評価しその魅力を伝える「体感ルート・ガイドマップ」の作成に取り組んできました。途中、東日本大震災により県内の歴史的建造物や街並みが大きな被害を受け、このプロジェクトも中断を余儀なくされましたが、震災後時間が経過し復旧が進みつつあることを受け、このたび3年ぶりにプロジェクトを再開し、シリーズ第4弾となるこの「体感ルート・ガイドマップ水戸街道・筑波編」を発行することになりました。

今回は、つくば市北条からスタートして、土浦一高・土浦まちかど蔵周辺まで足を伸ばし、その後、国指定重要文化財となっているかすみがうら市の茅葺き民家 椎名家住宅を見学、さらに石岡市に移動して、府中誉の酒蔵、昭和の看板建築の数々を見学するルートを選定しました。

いずれの地域でも、震災や竜巻で大きな被害を受けながらも、確実に復旧しつつある建物や街並みの様子を見て取れるルートとなりました。

先人たちから引き継いだ大切なむかしの家々を、この先もずっと手間と愛情をかけて守り続けていこうとする当主の方々の決意に、私たちは深く敬意を表します。

この冊子がきっかけとなって、地域の人々の暮らしとともにあり続ける歴史的な建物の魅力・価値を見出し、あらためて自らの住む地域の魅力に目を向けることにつながれば、たいへんうれしく思います。

茨城県建築士会「まちづくり委員会」



1 全体マップ

つくば市 北条

- 4 宮本家住宅——敷地内の8棟すべてが国登録有形文化財
見世蔵には江戸時代の商売道具も展示
- 7 矢中の杜 (旧矢中龍次郎邸)——昭和初期の上流階級の
絢爛豪華な文化が薫る館
- 11 北条ふれあい館 (旧田村呉服店)
——黒漆喰にベンガラ朱が映える大正末期の店

土浦

- 13 旧土浦中学校本館——明治の若き設計技師が残した壮麗なる学び舎
- 17 中城通り——江戸と水戸を結ぶ宿場町の面影残すまち
- 20 土浦まちかど蔵・大徳——技術の粋を尽くした数々の意匠が、
江戸の商家の隆盛を語る
- 22 土浦まちかど蔵・野村/レンガ蔵 (喫茶・蔵) / 吾妻庵本店
- 24 矢口家住宅——平成に甦る江戸の老舗酒店

かすみがうら市 土浦市郊外

- 26 椎名家住宅——東日本最古の茅葺き民家 曲がり材梁組みの迫力
- 27 狩野平左衛門岳也邸——江戸中期から現在まで
代々住まわれてきた茅葺き民家
- 28 富岡家住宅 / 木村家住宅 / 中貫宿本陣

石岡

- 30 府中誉——創業160年の造り酒屋。明治初期から昭和までの建築が勢揃い
平松理容店 / すがや化粧品店 / 喫茶四季 / 森戸文四郎商店 /
34 十七屋履物店 / 久松商店 / 丁子屋 / きそぼ東京庵 /
福島屋砂糖店 / 栗山呉服店
- 38 青柳新兵衛商店——東日本では大変珍しい「うだつ」が上がった袖蔵
- 39 旧千手院山門 / 都々一坊扇歌堂 (六角堂)

- 40 タイムテーブル
- 41 茨城県建築士会について

コラム [いばらきみより豆知識]

- 9 建材研究者、
矢中龍次郎のこと

「日本の道百選」に
名を連ねる「つくば道」
- 12 筑波大生と地域が
タッグを組んで開発した
特産スイーツ!

コラム [いばらきみより豆知識]

- 15 設計技師、
駒杵勤治のこと

80万人が集まる、
土浦の秋の風物詩
「土浦全国
花火競技大会」

コラム [いばらきみより豆知識]

- 31 幻の酒米「渡船」を
再生させてつくった、
こだわりの吟醸酒

全国から
数十万人が集まる
「石岡のおまつり」
(常陸國總社宮例大祭)
- 37

39 都々一坊扇歌のこと

江戸時代、
筑波山詣での
起点として
栄えたまち

つくば市
北条





宮本家住宅

敷地内の8棟すべてが国登録有形文化財
見世蔵には江戸時代の商売道具も展示

江戸末期の弘化4年(1847年)に建てられた見世蔵に一步入ると時代劇でおなじみの帳場格子や元禄期の銭函、天明期の引き出し、弘化期の証文箱、有明行灯など、江戸時代の商売道具や生活用品が展示されており、江戸時代にタイムスリップしたような気分が味わえます。江

戸時代のシャッターともいべき「揚戸」は今でも上げ下ろしができるそうです。

また、明治時代の郵便局の看板、大正時代のキャッシュレジスター、蓄音機などもあり、時代の流れを感じることができます。平成15年には、敷地内の8棟すべてが国登録有形文化財に登録されました。



江戸時代のシャッター「揚戸」

中庭にある穀物蔵(米蔵)は、江戸後期のもので3間×5間と一般的な土蔵より一回り大きい造りになっています。その空間を活かして、平成20年に、音楽ホール「宮清大蔵」として改修され、地域みやせいおくらにおける芸術文化の交流拠点として活用されています(写真はp6に)。穀物蔵には

室内側の壁に木棧が張り巡らされていますが、それが音響効果に功を奏したようです。平成21年2月にはウィーン・フィルのメンバーによるウィーン・ピアノ五重奏団のサロンコンサートが開催され、絶賛を博し、北条の名前を全国に広めることとなりました。

昭和初期の上流階級の
絢爛豪華な文化が薫る館

内部の壁に巡らされた木椽が音響に奏功し
穀物蔵は、海外の音楽家も迎える音楽ホールに



コンサートホールとして改修された穀物蔵の内部

所在地：つくば市北条188

建築用途：店舗、穀物蔵

建てられた時期：見世蔵—江戸末期（弘化4年）／穀物蔵—江戸後期

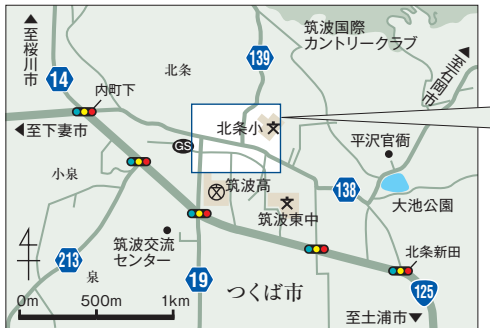
構造・特徴：土蔵造2階建（見世蔵、穀物蔵とも）

問合せ：TEL.080-6788-0693

*個人宅です。見学や撮影は必ず宮本家の許可を取ってから行ってください。



ウイーン・ピアノ五重奏団による演奏風景 撮影—齋藤さだむ



なかもり
や
矢中の杜
(旧矢中龍次郎邸)

贅を尽くした和洋折衷様式の内装が、
当時の上流社会の流行を伝える



食
堂

セメント防水剤「マノール」の発明者である矢中龍次郎氏の住居として建築された木造の近代和風住宅です。昭和13～28年（1938～1953年）と戦時下を通じて建てられました。

約770坪の広大な敷地には本館（居住棟）、別館（迎賓棟）などの建物が現存し、その廻りには全国の名石を集めた庭園が広がっています。

今はシート防水に改修されましたが、自らが発明した防水剤の展示場として陸屋根（ルーフバルコニー）があること、風の通

りを考えた天井や建具、当時上流社会で流行していた畳敷きの床に椅子とテーブル、マントルピースといった和洋折衷様式の豪華絢爛なインテリアなどが特徴です。

地元で「矢中御殿」と呼ばれているこの建物は、約40年間空き家となり、荒れ放題でした。現在では所有者が変わり、NPO法人“矢中の杜の守り人”が少しずつ手入れをしながら、地域の文化遺産としての保存活用に取り組んでいます。

平成23年には国登録有形文化財に登録されました。

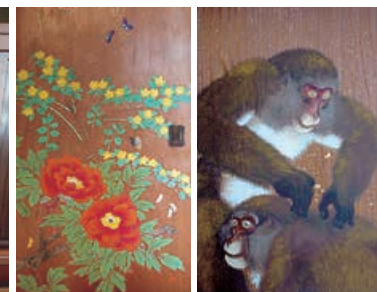
座
敷



極めて希少価値の高い「モミジ」の床柱を使用した床の間。その木目の美しさには、目を瞠るものがある



マントルピース



木材に直接描かれた大胆な絵が家中を彩る



建材研究者、矢中龍次郎のこと

建材研究者、実業家。セメント防水剤「マノール」を開発して財をなし、故郷である北条にこの自邸を建てました。ここでは、「永年の研究、発明成果を適用し、木造のモデル住宅を造る」という想いと「皇族が休息できる迎賓空間を設える」という意図があったといわれます。旧矢中邸では、単に豪華なだけでなく、マノールを使用した陸屋根のほか、

彼の研究成果が反映された独特の構造や材料を数多く目にすることができます。



陸屋根

コラム
いばらき
みまもり
豆知識

台所や女中室に残る生活道具からは、昭和初期の暮らしの息づかいが聞こえてくる

台所



昭和初期の生活の様子がそのままの形で残る台所



天火（オープン）

電気炊飯器

トースター

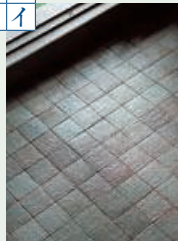
冷蔵庫

女中室



女中室にも当時の道具がいくつも残り、昭和の暮らしの息づかいを伝える

ルタイ



玄関に貼られた美しい布目タイル



各所に魅力的なタイルが使われている

所在地：つくば市北条 94-1

名称：矢中の杜（旧矢中龍次郎邸）

公開日：毎週土曜日

（詳しくは下記までお問合せください）

建築用途：住宅

建てられた時期：昭和13～28年

構造・特徴：主屋—木造平屋建（一部地下室有り）／離れ—鉄筋コンクリート造及び木造2階建

問合せ：TEL.090-6303-4531



庭園も建物同様に贅を尽くした造り。愛媛県の伊予の青石、佐渡の赤石、京都の鞍馬石など全国の名石が集められている。



北条ふれあい館（旧田村呉服店） 黒漆喰にベンガラ朱が映える大正末期の店

黒漆喰の壁、ベンガラ塗りのベランダが美しい大正末期開業の旧呉服店です。2階は、増築した東棟と併せて東西2棟からなり、大正モダンの雰囲気漂わせる面白い造りになっています。

以前「ふれあい館」として使われていた建物が竜巻の被害で倒壊してしまい、平成24年9月から新たに街の情報発信や観光客との交流の拠点となり、北条街づくり振興会のメンバーが交代で店番をされています。地域の見どころや地元的生活習慣などの情報が手に入ります。



所在地：つくば市北条 39

建築用途：店舗

建てられた時期：大正末期

構造・特徴：木造2階建

問合せ：TEL.080-6788-0693

「日本の道百選」に名を連ねる「つくば道」

江戸時代、3代将軍徳川家光が知足院中禅寺（現在の筑波山神社）を再建する際、資材運搬路が整備されて、それが「つくば道」という参詣道となりました。

その起点であった北条地区は、門前町として繁栄し、農産物の集散地とい

う役割をも担い、酒・醤油の醸造などが行われ、商家町としても発展しました。

北条地区だけでなく、「つくば道」沿いの神郡地区などにも、かつて参詣道として賑わっていたころの雰囲気が今も随所に残っています。



北条の街並み



「つくば道」には、坂に沿ってつくられた美しい塀が残る



神郡（かんごおり）から筑波山を望む

筑波大生と地域がタッグを組んで開発した特産スイーツ！

北条は美味しい米の産地で、かつて北条米は皇室に献上されていたこともあります。その米を使った「北条米スクリーム」は、もちもちとした独特の食感が楽しめる地元の特産スイーツとして人気を集めています。これは、筑波大生のアイデアで

誕生したもので、平成20年の夏から、学生と地域が協力して本格的な商品化プロジェクトに取り組み、開発されたもの。筑波大生と北条は、さまざまな分野で緊密な関係を築いています。



北条米スクリーム

明治の若き
設計技師が残した
壮麗なる学び舎

土浦市 旧土浦中学校 本館



豊かな緑に囲まれて佇む、
桜色の優美な
ゴシック風建築



建物の外観にも内部にもアーチ型意匠がモチーフとして用いられている



ギリシャのコリント
式建築などによく見
られたアカンサスの
葉の柱頭装飾



本館西側には実際のアカンサスが植えられ、夏には美しい白い花を咲かせる

明治37年(1904年)に建築された旧土浦中学校の本館(現在・土浦一高)は、国の指定重要文化財です。設計者は東京駅や日本銀行本店を設計した辰野金吾の弟子であり、茨城県営繕技師であった駒杵勤治で、現存する旧太田中学校講堂(現在・太田一高)なども手がけました。

木造平屋建で建築され、平面は凹字型、左右対象をなした正面を重視した古典的な手法で、建築様式はゴシック風の

ものです。建築当時の屋根は宮城県産の雄勝石^{おがつし}で葺かれていました。

現在残っているのは、当時の2分の1に当たる部分ですが、今もお学校の部活動などで生徒に活用されており、ガラスは当時の手漉きのガラスのままで残されています。また、一部の教室は旧土浦中学校時代の机を忠実に復元して、往時の教室の雰囲気を感じさせており、映画やドラマのロケにも使用されています。



設計技師、駒杵勤治のこと

この旧土浦中学校の校舎は、長い間外国人の設計による建物と考えられてきましたが、昭和49年(1974年)、本館の天井裏から右の棟札が発見されたことで、駒杵勤治の設計によるものと判明しました。駒杵は、明治10年(1877年)に山形県に生まれ、明治32年(1899年)に東京帝国大学工科大学建築学

科に入学。8ヵ月早く繰り上げ卒業をした後、茨城県営繕技師として採用され、わずか2年強の間に、土浦中学校や太田中学校講堂など、数多くの質の高い公共建築を残しています。

旧土浦中学校上棟時棟札



コラム
いばらき
みみより
豆知識



手漉きガラスの大窓から
優しい陽光が教室にふり注ぐ

江戸と水戸を結ぶ
宿場町の
面影残すまち

土浦市 中城通り

所在地：
土浦市真鍋4-4-2

名称：
旧土浦中学校本館

* 県立土浦第一高等学校の敷地内にあります。旧本館外観の見学・撮影は自由です。ただし、内部の見学は、原則として毎月第2土曜日にもみ可能となっています。(詳細は下記までお問合せください)

HPなどの公式情報：
<http://www.tsuchiura1-h.ed.jp>

建築用途：校舎

建てられた時期：明治37年(1904年)竣工

構造・特徴：木造平屋建

管理者・問合せ：県立土浦第一高等学校

TEL.029-822-0137



土浦市・中城通り

土浦のまちの歴史

江戸に幕府が開かれた直後の慶長9年(1604年)、江戸と水戸を結ぶ水戸街道が土浦のまちを走り、霞ヶ浦、北浦を経て利根川に入って江戸湾まで至る「水のみち」が形成されてから、「ひと」と「もの」が盛んに行き交う水陸交通の要地として、土浦のまちの賑わいの歴史が始まりました。以来、多くの商家が軒を連ね、土屋家九万五千石の城下町でもありました。現在の阿見町に海軍航空隊が置かれた昭和4年(1929年)から終戦に至るまでは海軍の町としても栄えました。土浦は、江戸時代に礎が築かれて、賑わい続けたまちです。長く、交通と産業の発展に支えられ、水戸に次ぐ常陸国第二の都市として繁栄してきました。現在、つくば市の発展により、土浦の方向性が問われていますが、歴史に裏付けられたその個性を生かしながら、街並みの賑わいの創出を図っていく時期にきているのではないのでしょうか。

郁文館は土浦藩士子弟のための藩校で、主屋は昭和10年(1935年)に取り壊されましたが、この正門だけは往年の姿を伝えています。



郁文館正門



土浦聖バルナバ教会

昭和初期に建てられた茨城県南地域初の鉄筋コンクリート造と伝えられています。



亀城公園



江戸時代に築かれた土浦城址です。土浦城は平屋で、堀に囲まれた姿が水に浮かぶ亀を連想させたことから、「亀城」とも呼ばれました。写真上の太鼓櫓門は城郭建築の遺構としては関東唯一のものであり、公園の象徴となっています。



大手町

文京町

亀城公園北

常陽銀行土浦支店



土浦市立博物館

亀城公園に隣接し、土浦城二の丸跡に建てられた歴史系博物館。「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、土浦の歴史と文化を紹介しています。

妙頭寺 卍

明治25年(1892年)建造の「野村」のレンガ蔵は、改修され、レトロな雰囲気が味わえる「喫茶・蔵」として人気を集めています。→p22



レンガ蔵

水戸地方裁判所土浦支部

「大徳」と向かい合って建つ「野村」は、江戸後期から明治初期に建造された蔵。「大徳」同様市民交流の場として開放され、民俗・予科練関連の資料が展示されています。→p22



土浦まちかど蔵・野村

中央

中央1丁目
中央2丁目

天ぷら「ほたて」



明治2年(1869年)創業の天ぷら店。土浦市最古の飲食店として知られる存在です。明治の町屋の風情漂う寄棟造りの木造2階建。

土浦まちかど蔵・大徳



江戸時代末期からの商家・呉服商である「大徳」の見世蔵・袖蔵・元蔵・向蔵を改装して、特産品の販売や郷土資料の展示を行い、市民交流の場となっています。観光案内も行っていきます。→p20

吾妻庵本店



屋根上の「うだつ型行灯看板」が趣きを感じさせる創業130年の蕎麦店です。→p23

矢口家住宅



矢口家住宅は、蔵造主屋と見世蔵が並ぶ江戸時代の貴重な町屋建築。県指定文化財となっています。→p24

至かすみがうら市

▲至かすみがうら市



土浦まちかど蔵・大徳

技術の粋を尽くした数々の意匠が、
江戸の商家の隆盛を語る



大きな鬼瓦がついた屋根、白い漆喰壁が映える「土浦まちかど蔵・大徳」は、旧水戸街道沿いに位置し、江戸時代後期に大国屋徳兵衛が創業した「大徳呉服店」のかつての建物で、江戸時代後期から明治後期にかけて建築され、見世蔵・袖蔵・元蔵・向蔵の4つの蔵からなっています。

内部は、近江八景が彫りこまれている廊下や、和室の屋久杉の天井、床の間にザクロの木が使用されるなど、絢爛な佇まいとなっており、江戸時代に発展した商家としての隆盛の面影をうかがうことができます。

現在は、土浦市の歴史の情報発信、

観光案内、市民交流の場として利用され、市内の特産品や土産品が販売され、土浦市観光協会の事務所としても使用されています。

また、蔵の奥には、神社もあります。



袖蔵の内部は、土浦の歴史に関する展示スペースに



床の間の天井の竿縁（さおぶち）には、ねじり加工が施されている。高温で蒸して加工する非常に高度な技術だ



見世蔵2階奥の住居スペースには、贅をこらしたさまざまな装飾があり見ごたえ十分。写真上は、下の畳と同じ形に張られた屋久杉の天井

通用階段の壁にさりげなく彫られた「鯉の滝登り」の彫刻

欄間には、「近江八景」を描いた彫刻が並んでいる



所在地：土浦市中央1-3-16
建築用途：店舗、住居ほか
建てられた時期：元蔵一天保13年（1842年）／見世蔵一江戸時代末期（一部明治期に増築）／袖蔵及び向蔵一江戸時代末期
構造・特徴：元蔵、見世蔵、袖蔵、向蔵いずれも土蔵造2階建
問合せ：TEL.029-824-2810
*「大徳」は、土浦市レンタサイクルの貸出受け場所にもなっています。土浦散策にご利用ください。

土浦まちかど蔵・野村

「大徳」とともに
観光情報発信の
拠点として

旧水戸街道である中城通りに位置する「土浦まちかど蔵・野村」は、江戸時代後期から明治後期にかけて建築され、主屋、袖蔵、文庫蔵、レンガ蔵からなっています。

野村家は江戸時代から続いた商家で、明治の頃は砂糖を商っていました。現在は土浦市の所有で、休憩所・展示室・蕎麦打ち体験工房などに利用されています。



吾妻庵 本店

うだつ型の
行灯看板が目印

明治6年(1873年)に建築された「うだつ型行灯看板」が特徴のお蕎麦屋さんです。創建当時の「うだつ」は平成10年の火災により焼失しましたが、日光東照宮を参考にしながら翌年復元されました。

現在は5代目が味を引き継ぎ、100年前の機械を使った喉ごしの良い蕎麦を提供しています。



レンガ蔵 (喫茶・蔵)

ロマンチックな蔵で
お茶をどうぞ

明治25年(1892年)に建築されたレンガ蔵は現在、喫茶店として利用されています。東日本大震災後、一旦は取り壊しが決定しましたが、平成24年6月、無事、修復工事を終え、営業を再開することができました。屋根は木造で造られ、ステンドグラスとレンガが綺麗に調和しています。



土浦市を代表する自然の風景が描かれた色鮮やかなステンドグラス

80万人が集まる、土浦の秋の風物詩「土浦全国花火競技大会」

土浦全国花火競技大会は、大正14年(1925年)、土浦市文京町の神龍寺の24代住職だった秋元梅峯が、私財を投じて行ったのが始まりで、平成25年で82回目を数える歴史ある花火大会です。年々盛大さを増していき、現在では、日本三大花火大会の一つとして、全国各地から約70~80万人の観客を動員し、約2万発の花火が打ち上げられる大規模な花火大会となっています。毎年10月に開催されるの

が恒例ですが、これにはもともと、実りの秋を祝い、農民の勤労を慰めるという意味も込められていたといわれています。



撮影一坂本淳(茨城県建築士会土浦支部)

コラム
いばらき
みみより
豆知識

矢口家住宅

平成に甦る江戸の
老舗酒店



震災前の矢口家。写真左は、ひな祭り時期に撮影したもの

見世蔵、袖蔵、元蔵、米蔵からなっており、嘉永2年(1849年)から慶応3年(1867年)にかけて建てられました。天保12年(1841年)の大火の後に建築されたこともあり、屋敷全体が土蔵造の建物で囲まれて、開口部は分厚い観音扉が用いられるなど、防火をかなり意識した造りになっています。

見世蔵は老舗の酒店として生まれ、元蔵には江戸時代から現存する金庫があり、かつては、常陽銀行の前身の銀行の金庫としても使用されていました。

天保9年(1838年)から大正5年(1916年)にかけての家相図が7枚残り、茨城県の土蔵造を代表する建物として、県の指定文化財となっています。東日本大震災により損傷したため、現在解体修理工事中です。平成28年頃にはすべての蔵の修復を終え、往年の姿が甦る予定です。

所在地：土浦市中央1-6-13

建築用途：店舗、住居

建てられた時期：

見世蔵、袖蔵—嘉永2年(1849年)

構造・特徴：土蔵造2階建



端正な茅葺き民家に
出会える地域



かすみから市
土浦市郊外



椎名家住宅

東日本最古の茅葺き民家
曲がり材梁組みの迫力



曲がり材が特徴の迫力ある梁組み

椎名家住宅は、曲がり材を用いた梁組みが特徴の東日本最古といわれる茅葺きの民家で、延宝2年(1674年)に建てられました。昭和45年(1970年)の修理工事の際、差さし鴨居がらのほぞから「延宝2年…」の墨書銘が発見され、建築時期が明確にわかりました。建物の内部かまどで竈や囲炉裏で火を焚き、

煙で燻されることで柱や梁などの構造体の耐久性が高められて、現在に至るまで、江戸時代初期の頃の面影が残されています。この頃に建てられた現存する民家の梁は全体的に細く、江戸後期になるにしたがって太くなっていきます。国の重要文化財に指定されています。

狩野 平左衛門岳也邸

江戸中期から現在まで
代々住まわれてきた茅葺き民家



江戸初期の椎名家と比較するとより大きくなっている構造材

1700年代半ば、江戸時代中期に建築された茅葺きの民家で、近隣にある、江戸時代初期に建築された椎名家住宅(p26)と比較してみると、構造材は著しく大きく、時代による建築様式の変遷をうかがうことができます。

もともと木炭・薪を生業としていた狩野

家が、先祖代々大切に守り続けた歴史的民家で、当主の平左衛門岳也さんは、「住んでいて落ち着く、愛着がある家」と話します。西側の2階建の部分は、明治になって増築されたものです。

かすみがうら市の旧出島地区には、現在も40軒近い茅葺き民家が残っています。

石岡

「看板建築」が
競演する!!
昭和モダンが
息づくまち。



富岡家住宅

現在も住居として使われる
風格漂う庄屋建築

元禄末期頃のものと思われる庄屋建築の建物で、今も住居として使われている県指定文化財です。藩主が領地見回りの際、休息の宿に利用した県内有数の優れた民家で、大きな茅葺き屋根が風格を漂わせています。

木村家住宅

旧水戸街道沿いに残る江戸末期の旅籠

かすみがうら市の旧水戸街道沿いの下稲吉は、江戸時代に「稲吉宿」と呼ばれ、宿場として栄え、当時17軒の旅籠が軒を連ねていました。木村家住宅(旅籠・皆川屋)は江戸時代末期の建築で、旧水戸街道に残る唯一の旅籠です。



中貫宿本陣

大名が休息した小休本陣

旧水戸街道を通行する大名が休息した小休本陣。寄せ棟造の茅葺き平屋建(一部中2階)でしたが、現在屋根は銅板葺きに。唐破風造りの屋根の下に2間半の台付玄関のある、堂々とした本陣建築です。



府中誉

創業160年の造り酒屋。
明治初期から昭和までの
建築が勢揃い



幻の酒米「渡船」を再生させてつくった、こだわりの吟醸酒

府中誉の代表銘柄である「渡舟(わたりぶね)」は、酒造りに最適な超軟質米である幻の酒米「渡船」を、7代目当主の山内孝明さんが時間をかけて再生させ、筑波山麓の谷津田で栽培して原料米としている酒です。「渡船」で醸した「大吟醸渡舟」

は、全国新酒鑑評会にて金賞に輝いています。そのほか、季節限定で出荷される「太平海」や純米・本醸造の「府中誉」があり、茨城産の原料にこだわった丁寧な酒づくりが全国の日本酒愛好家から高い評価を受けています。

コラム
いばき
みみより
豆知識



幻の酒米「渡船」を再生させた7代目当主の山内氏

昭和初期に建設された穀蔵。美しい「洗い出し仕上げ」が左官技術の高さを伝える



主屋の北方に建つ黒漆喰塗りの文庫蔵。外から見ると2階建に見えるが、内部は3階建の土蔵造

長屋門は幕末から明治初期頃の建築。かつてこのあたりの玄関口であった幸町の見付門を模したと伝えられる

ふちゅうほまれ
府中誉は、石岡市の中心市街地に位置する安政元年(1854年)創業の造り酒屋で、敷地内の主屋・長屋門・文庫蔵・穀蔵・仕込蔵・釜場・春屋の計7棟が国の登録文化財となっています。明治2年(1869年)建築の主屋は、1階2階とも街路に面した北面廻りを土壁で塗り込めた防火的な造りになっており、大黒柱は約一尺(30cm)角で、2階までの通し柱になっています。梁は黒松で、その成(高さ)は大きいもので60cmにも及びます。

明治27年(1894年)建築の文庫蔵は、黒漆喰塗3階建の土蔵造、穀蔵は昭和4年

(1929年)の建築で、外部は当時流行した人造石洗い出し仕上げとなっています。石岡を代表する明治初期から昭和初期までの歴史的建造物が敷地内に立ち並んでいます。

所在地: 石岡市国府5-9-32
建築用途: 酒造工場
建てられた時期: 主屋—明治2年(1869年) / 長屋門—明治初期 / 文庫蔵—明治27年(1894年) / 穀蔵—昭和4年(1929年)
構造と特徴: 主屋—木造一部土蔵造2階建 / 長屋門—木造平屋建 / 文庫蔵—土蔵造3階建 / 穀蔵—木骨コンクリート造2階建
問合せ: TEL.0299-23-0233



石岡市・中町通り

石岡の歴史

石岡という小さなまちも、関東でも一際目を引くほどの重厚な歴史を刻み込んできました。今から約1300年前「常陸国」の中心として国府がおかれ、国分寺、国分尼寺が建立されました。律令制が解体した平安時代末期からは、大掾氏(平氏)が治め、戦国時代末期に佐竹氏に代わり、江戸時代は水戸家御連枝の府中松平家が治めました。明治、大正、昭和には新治郡の中心的商都として、醸造、製糸などの産業が栄えました。しかし、現在では他の地方都市と同じく、郊外にマーケットが移り、中心市街地の空洞化が目立っています。

昭和3年(1928年)建築。外観のみならず内部にも、三和土(たたき)に大鋸屑(おがくず)を混ぜた床や理容鏡、椅子などがそのまま保存されています。→p34



平松理容店

広大敷地内に何棟もの蔵を持つ屋敷です。通りから見えるレンガ造の袖蔵には、東日本では珍しい防火壁の「うだつ」も見られます。→p38



旧千手院山門・都々一坊扇歌堂(六角堂)

浄瑠璃山東方院国分寺の境内にある、天正元年(1573年)ごろに建てられたと推測される山門と石岡ゆかりの都々一坊扇歌を記念して建立された六角堂。→p39



青柳新兵衛商店

昭和7年(1932年)頃に建てられた木造2階建の和風食堂建築。数寄屋風の意匠が洗練された雰囲気を感じさせます。→p36



きそば東京庵

石岡の「看板建築」

関東大震災後、減災のため幹線道路の拡幅が行われました。減歩された土地を有効利用するために、新しい商店建築が考えられ、瞬く間に各地に広まっていきました。その特徴は、幹線道路に面した表側は、一枚の板のように平らな面、そこにモルタルやタイル、銅板などで洋風な装飾が施され、一見洋風の造り。裏側は、木造瓦葺屋根の店舗兼住宅の和風建築造り。建物の前面に大きな看板を取り付けたように見えるところから「看板建築」と呼ばれています。石岡市の看板建築の大部分は、昭和4年(1929年)の大火により市街地の4分の1が消失した後、建築されたものです。



昭和5年(1930年)頃に建てられた雑貨店(現在は化粧品店)。コリント・イオニア様式風の柱頭飾りなど重厚な外観がひと際目を引きま。→p34



すがや化粧品店

昭和5年(1930年)頃に建てられた飼料店(現在は生花店)。柱のレリーフ、縦長の窓など全体にアールデコ調の気品漂う外観です。→p35



森戸文四郎商店

昭和4年(1929年)の大火で焼失を免れた数少ない建物。現在は観光施設「まち蔵監」として、物産品の販売所や喫茶室を運営。内部の見学も自由ができます。→p36



丁子屋



府中營

安政元年(1854年)創業の造り酒屋。主屋・長屋門・文庫蔵・穀蔵・仕込蔵・金場・春屋(つきや)の計7棟が登録文化財となっています。→p30



福島屋砂糖店

昭和6年(1931年)建築の砂糖問屋。木造2階建ですが、外壁が土壁漆喰塗りではなく、コンクリートが使われている珍しい建物です。→p37



久松商店

建物の中央部分で半円状にデザインされた帯状の「コーニス」と呼ばれる装飾が印象的な看板建築です。→p35



十七屋履物店

履物屋。昭和4年(1929年)の大火後最初に再建され、この地区における看板建築の先駆けとなった建物です。→p35



栗山呉服店

昭和7年(1932年)頃に建てられた木造2階建の商家建築です。2階正面のガラス戸の組子(くみこ)がとても美しい印象です。→p37



喫茶四季

屋根に付けられた煙突風の突起物など非常に特徴ある造形を持つ建物。昭和5年(1930年)頃の建築物です。→p34



平松理容店

内部装飾も秀逸。現在も営業。

昭和3年(1928年)に建てられた理容店。現在も営業中。木造2階建の看板建築。正面外壁はモルタル洗い出し。店内の保存状態もよく、三和土(たたき)に大鋸屑(おがくず)を混ぜた床は大変珍しい。漆喰仕上げの天井には、コリント様式風のアカンサスの葉をあしらった天蓋や理容鏡、理容椅子など、昭和4年(1929年)の大火を免れた建築当初の姿がよく保たれています。

すがや化粧品店

ギリシャ神殿風の重厚さ

昭和5年(1930年)頃に建てられた雑貨店(現在は化粧品店)。木造2階建の看板建築。正面外壁はモルタル洗い出し。ギリシャ神殿を思わせる造りで、屋号を冠したペディメント、イオニア・コリント様式風の柱頭飾りなど、複数の特徴を取り入れて他に無い新しいデザインとなっています。重厚な外観はこの地区における看板建築の秀逸なるもののひとつです。

喫茶四季

特異な左右非対称のデザイン

昭和5年(1930年)頃に建てられた2軒長屋の貸店舗(現在は1店舗喫茶店営業中)。木造2階建の看板建築。正面外壁はモルタル洗い出し。コリント様式風の柱頭飾りや屋根に立ち上げた煙突風の突起物が3本あり、特異な造形を持っています。また、建物中心の柱型から左右が違うデザインになっており、向かって右側は四角い窓で左側はアーチ型の窓飾りになっています。

森戸文四郎商店

窓枠上のレリーフが出色

昭和5年(1930年)頃に建てられた飼料店(現在は生花店)。木造2階建の看板建築。正面外壁はモルタル洗い出し、両端の柱型は褐色タイル貼り。窓枠上にあるレリーフ装飾が印象的で、縦長の窓など全体にアールデコ調の外観は、正面を洋風の意匠で飾る看板建築の好例です。

十七屋履物店

美しいロンバルディア帯装飾

昭和5年(1930年)に建てられた履物店。現在も営業中。木造2階建の看板建築。正面外壁はモルタルリシン掻き落しで色も艶やかです。2階は持ち送り風の柱頭飾りを中心にして縦長の連窓を左右に配置。軒下には「ロンバルディア帯」と呼ばれている小さなアーチが連続した装飾が施されています。昭和4年(1929年)の大火後、この地区で最初に再建され、石岡における看板建築の先駆けとなった貴重な建物です。

久松商店

こちらは可憐なコーニス装飾

昭和5年(1930年)頃に建てられた化粧品・雑貨店(現在は雑貨店)。木造2階建の代表的な看板建築です。正面外壁は銅板貼り、両端の柱型はタイル芋目地貼り。その柱型の上部には緑色タイルにふくろうのようなものが描かれています。そこから帯状の「コーニス」と呼ばれる装飾が施され、中央部分でセンスよく半円状にデザインされています。



丁子屋 江戸末期の商家建築。現在は観光の拠点に

江戸時代末期に建てられた染物店（現在は石岡市観光協会が管理運営している観光施設「まち蔵藍」）。外部は黒漆喰の土蔵壁、

瓦葺き。間口5間、奥行き約11間。一見平屋に見えますが、木造2階建（2階は中2階構造）の商家建築。この地区の商家建築で

は唯一、昭和4年（1929年）の大火で消失を免れた建物で、近世末から明治初期を今に伝える貴重な建物です。



きそば東京庵

この地域では珍しい
数寄屋風の粋な意匠

昭和7年（1932年）頃に建てられた蕎麦屋。現在も営業中。木造2階建の和風食堂建築。戦後、座敷部分を取り払い、土間にテーブルと椅子を置いて客用の空間としています。数寄屋風の洒落た意匠は、この地域では珍しいものです。



福島屋砂糖店 懐かしの手押しトロッコ



昭和6年（1931年）に建てられた砂糖問屋。木造2階建の商家建築。外部は黒塗りの土蔵風壁、瓦葺き。間口4.5間、奥行き11.5間。土蔵造の壁が、漆喰塗りではなくコンクリートでできているのは大変珍しい。黒塗りの外壁が外観に重厚さを与えています。右側通路には、重い荷物を奥の倉庫まで運んでいた手押しトロッコがあり、当時の商いを今に伝えています。

栗山呉服店

瀟洒なガラスの組子細工

昭和7年（1932年）頃に建てられた呉服店。現在も営業中。木造2階建の商家建築。外壁は押し縁板張り。2階正面のガラス戸の瀟洒な組子は、明治以降における日本建築の近代化の特徴をよく表しています。



全国から数十万人が集まる「石岡のおまつり」（常陸國總社宮例大祭）

毎年9月に行われる、茨城県を代表するこの祭りは、奉納相撲が始まりで、江戸時代後期にさまざまな風流物が加わり、近代になると總社宮の例大祭へと移行しました。さらに富裕な商人層が贅を凝らした山車を取り入れ、菊花紋の大神輿とそれに供奉する行列が整えられ、現在の形になりま

した。地域を挙げて祝われるため「石岡のおまつり」とも呼ばれ、全国から数十万人もの観光客が訪れて賑わいます。



コラム
いばらき
みみより
豆知識

青柳新兵衛商店



東日本では大変珍しい
←「うだつ」が上がった袖蔵



所在地：石岡市府中3-10-24
建築用途：店舗兼住宅
建てられた時期：明治42年ほか
構造・特徴：見世蔵一土蔵造2階建／
袖蔵一レンガ造／防火壁（うだつ）／
レンガ門一施築された高級レンガ使用

青柳新兵衛商店は、江戸後期から両替商、後に綿の仲買商となり、明治29年（1896年）には、常磐線の開通により、米穀、肥料商としての地位を確立し、現在に至っています。現状の屋敷構は、明治以降に整えられたもので、面積は約5,000㎡。広大な敷地にある主な建物は、見世蔵・表門・土蔵・米蔵6棟（内1棟は石蔵）・事務所・裏門（レンガ門）・剣道場・住宅等で、敷地周囲にはレンガ塀が廻っています。

見世蔵は、明治42年（1909年）頃建てられた伝統的な2階建の商家建築。瓦葺き切妻屋根平入の土蔵造で、レンガ造の袖蔵が付いています。袖蔵には防火壁の

「うだつ」*が上がっています。「うだつ」は東日本では大変珍しいものです。

レンガ門は大正5～10年（1916～1921年）に建てられました。レンガ造平屋建。小屋組みは木造、寄せ棟瓦葺き。正面出入口はアーチ形の両開き扉で、左脇には片引き戸があります。レンガは、鉄・コンクリート・ガラスと並び、近代化を象徴する材料のひとつです。青柳新兵衛商店は、地方の近代化遺産にも位置づけられます。

*「うだつ（宇立つ）」を造るにはお金がかかり、これが上がっている家は比較的裕福な家に限られることから、「生活や地位が向上しない」「状態が今ひとつ良くない」という意味の「うだつが上がらない」の語源のひとつであると考えられています。

せんじゅいん 旧千手院山門

安土桃山時代の
様式が残る山門

浄瑠璃山東方院国分寺の境内にある旧千手院山門です。千手院は石岡の国分寺の東側に存在していた寺院で、一度は衰退しましたが、天正元年（1573年）に再興され、この山門もその頃に建てられたものと推測されています。安土桃山時代の様式が残っています。石岡市指定文化財。



旧千手院山門の正面にある、大驚が猿の頭を掴んでいる彫刻。これは観音様の化身が人の煩惱を取り去り、救い上げてくれる様を表しているといわれています。

どどいつぼうせんか 都々一坊扇歌堂（六角堂） 七七七五のあの流行歌の生みの親

国分寺の境内には、都々一坊扇歌を記念し、町内有志の呼びかけにより建立された扇歌堂があります。堂の脇に歌碑があり、「たとと売れても 売れない日でも 同じ機嫌の 風車」と刻まれています。



所在地：石岡市府中5-1
建てられた時期：
昭和8年4月8日

都々一坊扇歌のこと

都々一坊扇歌は、文化元年（1804年）、常陸太田市生まれ。江戸に出て都々逸節の著名な寄席芸人となりましたが、幕府に批判的な歌をつくって江戸払いとなり、姉の嫁ぎ先の府中（石岡）に身を寄せ、嘉永5年（1852年）48歳でこの地で没しました。

都々逸とは、今で言えば流行歌であり、

七七七五の26文字で詠われるものです。江戸の芸人たちは、三味の音に合わせて歌い、庶民たちは洒落た歌詞と小粋な節回しに共感しました。特に浅草を中心に大流行し、その元祖として一世を風靡したのが都々一坊扇歌でした。



都々一坊扇歌
浮世絵

コラム
いばらき
あまはり
豆知識

ひたちのくに
常陸国のむかしの家【体感ルート・ガイドマップ】水戸街道・筑波編
タイムテーブル

- この冊子でご紹介している「むかしの家々」を1日で巡るタイムテーブル案です。
- 発着地には、筑波交流センターを設定しました。常磐自動車道の土浦北ICからおおよそ12.7キロ、車で約20分のところにあります。また、各時間を算出する際の移動手段は普通乗用車を前提としています。*大型車・大人数の場合は、所要時間が増すことが予想されます。
- 1日で巡るルートとしては、目的地がやや多めの設定になっています。より余裕を持った見学をご希望の方は、この案をもとに日程や見学地の数などをご調整ください。
- 土浦市・かすみがうら市郊外については、広範囲にわたるため、このルートでは中貫宿本陣(車中から見学)、木村家、椎名家に絞った設定としています。
- 冬季に巡る際はなるべく早めにスタートしましょう。*日の入りが早く、17時には暗くなりますよ。

見学地	見学時間	移動時間(距離)	時刻(ご参考)
筑波交流センター			8:30 出発
		↓	徒歩で移動
 北条散策 宮本家住宅/矢中の杜 北条ふれあい館	90分		8:30~10:00
		↓	30分(14.5km) 車で移動
 旧土浦中学校本館	30分		10:30~11:00
		↓	5分(1.7km) 車で移動
 土浦市・中城通り散策 亀城公園 土浦まちかど蔵・大徳 土浦まちかど蔵・野村 レンガ蔵/矢口家住宅 ほか	100分	昼食時間含む	11:05~12:45
		↓	15分(5.2km) 徒歩と車で移動
 中貫宿本陣(車中から見学)	5分		13:00~13:05
		↓	10分(3.5km) 車で移動
 木村家住宅	10分		13:15~13:25
		↓	30分(10.7km) 車で移動
 椎名家住宅	20分		13:55~14:15
		↓	45分(16.9km) 車で移動
 石岡市・中町通り散策 府中誉/青柳新兵衛商店 旧千手院 ほか	90分		15:00~16:30
		↓	30分(15.0km) 車で移動
筑波交流センター			17:00 終了

合計: 約8時間30分(見学時間: 約5時間45分/移動時間: 約2時間45分)

一般社団法人茨城県建築士会について

一般社団法人茨城県建築士会は、茨城県内に居住または勤務する建築士を中心に構成されている組織です。

組織の中には、会としての目的達成と事業活動の効率化のために委員会が設置されています。わたしたち「まちづくり委員会」では、一般の方を交えてのワークショップ、シンポジウムを実施するなどして、住みよいまちづくりに寄与する活動を行っています。

とくに近年では、茨城県教育庁のご協力をいただきながら、「いばらき地域文化財専門技術者育成研修(ヘリテージマネージャー育成研修)」を実施したり、この「常陸国のむかしの家」の冊子を制作するなど、地域に残る歴史的建造物の魅力を活かしたまちづくりに積極的に取り組んでいます。

*本会は茨城県より景観法に基づく「景観整備機構」の指定を受けています。

ひたちのくに
常陸国のむかしの家
【体感ルート・ガイドマップ】水戸街道・筑波編

発行 一般社団法人 茨城県建築士会
会長 柴 和伸
〒310-0852
茨城県水戸市笠原町978-30
建築会館2階
TEL.029-305-0329
<http://homepage1.nifty.com/ishikai/>

協賛 一般財団法人 茨城県建築センター
編集 茨城県建築士会 まちづくり委員会
武村 実/石坂 健一/小谷野 栄次/小林 澄夫/梶 ひろみ/杉田 次夫/島田 哲/江面 松男/中崎 妙子/篠根 玲子/岩永 至功/李 相鉄/佐藤 昌樹/津田 むつみ/永井 昭夫

デザイン 有限会社 平井情報デザイン室

初版発行 平成26年3月31日

*この冊子に掲載した情報は平成26年3月末現在のものです。





つくば市北条の観光に関するお問合せ

北条街づくり振興会 TEL.029-867-1801

〒300-4231 茨城県つくば市北条39 北条ふれあい館(旧田村呉服店)



土浦市の観光に関するお問合せ

土浦市観光協会 TEL.029-824-2810

〒300-0043 茨城県土浦市中央1-3-16



かすみがうら市の観光に関するお問合せ

かすみがうら市観光協会 TEL.029-897-1111

〒301-0192 茨城県かすみがうら市大和田562



石岡市の観光に関するお問合せ

石岡市観光協会 TEL.0299-43-1111(代表)

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1



石岡市の文化財に関するお問合せ

石岡市生涯学習課 TEL.0299-43-1111(代表)

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1



発行：一般社団法人 茨城県建築士会

協賛：一般財団法人 茨城県建築センター